

大学生が水道の将来を議論

横浜ウォーター 長野市、長野県立大と連携

横浜ウォーターは、長野市上下水道局、長野県立大学と連携して、秋葉芳江・同大学グローバルマネジメント学部教授の講義「キュレーター概論」において、「長野市



グループワークに臨む学生。水道と地域の未来を考えた

の見学やメタバース環境上でのライブ説明会などによる事前学習をしたうえで、未来志向で社会課題の解決を目指す「フューチャー・デザイン」を基に、長野市の水循環や水道の将来のために今必要なことを議論した。

8日に行われた講義では、先駆的に大学講義にフューチャー・デザインを取り入れている岡本剛・九州大学基幹教育院准教授によるレクチャーを実施、未来人になりきって現在の課題を発見し、施策立案や人材育成、自身の行動姿勢に生かす思考法であると説明し、「恥ずかしがらずに未来人になりきることが大事」「こういう提案を

しないといけないという付度は無用」などとポイントを紹介した。

その後、5人程度のグループに分かれ、まず20年前の市民や市役所に感謝や不満など、どのようなメッセージを伝えたいかを考えた。続けて、20年後の未来人になりきり、20年経った2045年の長野市の水道はどうなっていて、その中でどのように暮らしているか、具体的に身の回りの生活の様子について話し合い、さらに、それらを踏まえて、現在の自分たちに対するリクエストやメッセージを考えて、その結果を共有した。ある班では、将来の水道の姿は「水道料金が高くなっ

から応援していきたいと思えます。

今回の取り組みは、横浜ウォーターが国土交通省から受託した「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」の一環で、昨年10・11月に同社と茨城県城里町、茨城キリスト教

なものでなっている、現在の自分たちに対するメッセージは「料金が高くないようできることを考えてほしい」などと発表した。

秋葉教授の話：既に別の専門科目でフューチャー・デザインを実施していたところ、ご縁からこの科目で連携いたしました。100分間での実施でしたが、未来への「タイムトラベル」効果もあり学生は「未来人」を宿して考えることができ、有用性を改めて確認しました。

久保田裕史・横浜ウォータープロジェクト統括部長の話：ワークでは、水道を中心に地域社会の未来を考える未来共創の場となりました。今後も自治体と、地方の創生を担う若い世代との取り組みを企画や開催の面